

Vroni
Friederike
Kautzsch

Wang Jia

Rebecca
Milliman

特集

留学生、 芸大を語る

- 私たちはなぜ、芸大で学ぶのか

世界各地から日本を訪れ、芸大で学んでいる留学生たちが
どのように考え、何を目標しているのかをインタビューした。
異文化が交わることで生みだされる、芸術教育のすがたとかたち。

Mairiaux
Isabelle

Ri Un Kyon

Stephen
Dominic
Ellery

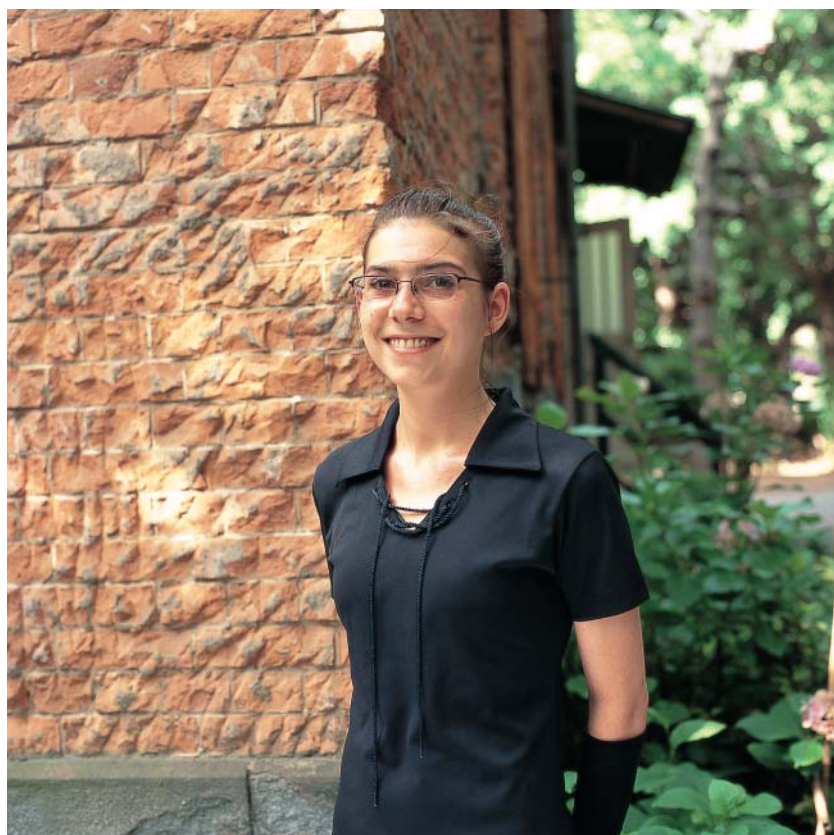
Rebecca Milliman

レベッカ・ミリマン

[アメリカ]

修士(油画)1年

日米の文化を、
双方向性をもってコミュニケーションしていく。



ア メリカのロチェスターに生まれ、幼少期を過ごしたのですが、五歳のときドローイングのコンテストで賞をとって以来、芸術家になることを夢見ています。一六歳のころ、近くに住んでいた陶芸家と知り合いになり、初めてアジアの芸術について知ることになります。そして、この先生の強い勧めもあってニューヨークの大学に入学して、陶芸を専攻することになる

のですが、陶器の起源を調べていくうちに日本と日本の芸術に出会ったのです。当時は、日本の文化をより詳しく知りたいと思っ、日本のデザイン雑誌を集めたりしていました。

陶器で博士号を取得した後も、日本についての研究意欲は強くなるばかりで、コネル大学の修士課程で、アジア学の日本語のプログラムを勉強しました。そして日本へ行くことを決意して、二〇〇〇年には京都へ移ります。

京都では、伝統的な町家に住んで、清水焼の工房で陶芸を学びながら独学で絵の勉強を始めるとともに、木屋町にあるビルでライブ・ペインティングのイベントに参加するといった活動も開始しました(この活動は、東京に移った現在も続けています)。

芸大に入ったのは今年からなのですが、絵画の技術をより高めたいと期待したのと日本の大学のなかでもとくに日本の芸術を詳しく知っている先生方がいらつしゃると思つたからです。

私の目標は、日本文化を英語で紹介するとともに、アメリカ人の絵画に対する考え方を日本人に伝えることができるということです。日米の文化を、双方向性をもってコミュニケーションしていくために役に立つことができれば、素晴らしいことだと思っています。

もちろん、自分自身の創作活動においては、日本の芸術文化をより深く知ること、作品世界を充実したものにしていきたいと思つています。

芸

大の姉妹校である清華大学の前身中
央工芸美術学院でプロダクトデザイ
ンを勉強していました。卒業後、父が筑波
大学のプロダクトデザイン専攻出身とい
うこともあり、この分野での日本の技術の優
秀さ、そして私自身日本文化に興味があり
現代の情報化社会に対応するプロダクトデ
ザインの研究を日本の大学であることを決
めました。

多摩美術大学の情報デザイン学科に進み
よりヒューマンインターフェイスに重点を
おいた情報化デザインを研究しました。視
覚障害者の方が「WEARABLEコンジュ
ータシステム」に近づくと、そこからさま
ざまな情報が得られ、都市のなかでも積極
的に行動することができるシステムを研究
しました。そしてこの研究を推し進めてい
くうちに、都市でのコンピュータと人間の
関係環境、建築の知識がないと研究開発が
進まなくなる。目に見えないものと現実の
結合、MR技術（Mixed Reality）を生か
し、ランドスケープ的な建築技術を勉強し
たいと考え芸大に入りました。

そこで現在の指導教員である六角先生に
出会ったことが自分の研究をより深めるこ
とができるきっかけとなりました。先生ご
自身、東洋伝統哲学、「曼荼羅」等を建築
に結合し、文化への造詣の深さにも大変意
かれるものがありました。

私にとって先生の力強いご指導のもと、
芸大については、私のような研究をしてい

る学生にとっては設備の面で少し物足りな
いと感じる部分があります。一つの提案と
して、取手校地とのコミュニケーションが
よりスムーズになればそついった面の問題
も解消されるのではないのでしょうか。
これからも東京芸術大学の学生の一人と
して先生、友人との出会い、自分のまわり
の環境に感謝し、更に研究に力をいれて頑
張っていききたいと思っています。

Wang Jia

王 佳

[中国]

博士（建築設計）3年

ランドスケープ的な
建築技術を勉強したい。



Vroni Friederike Kautzsch

フローニ・ フリデリケ・カウチ

[ドイツ]

修士(保存修復・工芸)1年

自然の形象と本質的特徴だけで
表すことができる日本文化。



私は最初、バレエの勉強や、ドイツの歴史・美術・哲学を学んでいました。

一九九八年からミュンヘンの国立民俗学博物館で保存修復研究を始めたのですが、芸術に興味はあっても自分自身でつくることにはあまり惹かれませんでした。保存修復の道に進んだのも、過去の優れた芸術作品に触れながら、美術史よりも深く、その

技術を知ることができると思ったからです。この博物館では油画・彫刻・フレスコ・染色・樹脂の全てにわたって研究をしました。一七世紀につくられた教会の祭壇に塗られた樹脂を復元したこともあります。

その後、ドイツやスイス、バーゼルの博物館や修復工房で仕事を続けたのですが、キリスト教芸術に深く携わることに限界を感じ始めていました。そこで、自分が修復にかかわってきた経験のなかで、最も印象に残っていることは何か思い返してみたいです。

ミュンヘンの博物館で修復したもののなかに、漆塗りの駕籠がありました。シーボルトが日本からもたらしたものだのですが、その多様な技術(漆・日本画・染色)を思い出し、日本でしかできない全体的な勉強をすることを決意したのです。

日本の文化は私たちの眼から見ても、ただエキゾチックなだけでなく、すごく奥が深いものがあると思います。たとえば物語の一場面を、日本の漆芸では一人の登場人物を描くことなく、自然の形象と本質的特徴だけで表すことができるのです。

芸大に入ってから二年。個人的にも最近、茶道を習い始めるなど、どんどん新しい世界が広がっています。目的やゴールに向かって進んでいくヨーロッパの文化と異なり、歩きながらさまざまな物事を考えていく日本の文化は、まだまだ奥が深いと実感しています。

—— 九九五年以降、南米、ロシア、フランスを中心に世界各地の劇場でオペラや交響曲を指揮しています。なかでもペルは、アレキパ交響楽団で芸術監督を務めるなど、最も積極的な活動拠点の一つといえるでしょう。

イギリスのエクスターというところで生まれ、八八年にはバーミンガム音楽院をクラリネットと作曲で卒業。その後、各国の奨学金を得て、ポーランドのクラコフ・アカデミーやロシアのサンクトペテルブルグ音楽院で学ぶことになりました。サンクトペテルブルグ音楽院では世界的に有名なイリヤ・ムーシシン教授について、大きな影響を受けました。芸大に来たのは九八年で、現在はマラーの交響曲を研究しています。

ムーシシン先生の指揮と教育のスタイルは一言でいえば、パシヨナータ。音楽は心の中にあるものは表現できるが、心の中にないものは表現できない、ということ。心の中で燃える、火が、音楽を生み出す。これはどの国においても変わりません。しかし、その自身が国民性によって異なるのです。ヨーロッパでも、国境が接していても国民性や文化が違う。日本の場合、音楽を生み出す心は、たいへん繊細な感性によって裏打ちされています。武満徹の音楽には、それがよく感じられます。

ヨーロッパの音楽家でも、ドビュッシー、ラヴェル、プッチーニらは、日本文化に触発されて曲を生み出しました。私がさまざま

まな国で演奏し、さまざまな国で音楽を学ぶのも、世界各地の多様な文化や心を知ることが、指揮をするうえで、知識の面でも感性においても豊かになれると思うからです。

Stephen Dominic Ellery

スティーヴン・ドミニク・エレリ

[イギリス]

博士（指揮）3年

繊細な感性によって裏打ちされた日本人の音楽性。



Ri Un Kyon

李 恩 敬

[韓国]

博士(音楽・ソプラノ)2年

韓国と日本とヨーロッパで
学んだ経験を生かす。



もできたのです。

その後、イタリアのミラノに留学し、のんびりした性格ではなかった私は世界一のソプラノ歌手だったレナタ・スコット女史とモンセラ・カバリエ女史のコースに参加し、数々の国際音楽コンクールにも入賞できました。しかし私には東洋人だという理由もあつて自分に一番似合う役は東洋人が主人公であるオペラ『蝶々夫人』の蝶々さんであるが、誰よりも綺麗な蝶々さんを演じるためには日本をもっと正確に理解する必要があると思い日本に再びくる決心をしました。芸大に入り多田羅迪夫教授の下で研究をしています。

私は、東洋の文化に大きな違いはなく、欧米の文化が入ることによって、国ごとの違いができてきたのではないかと考えているのです。日本には、ヨーロッパやアメリカの文化が早く入ったので、中国や韓国との違いが生まれたのではないのでしょうか。

私は幸いにして、韓国と日本とヨーロッパで学び、それぞれの地域の文化に触れることができました。これからはこの経験を生かして、音楽を通じた架け橋になりたいと思っています。

私 は四歳からピアノを習い始め、ピアノニストを目指していたのですが、一

七歳の時音楽の先生が勧めてくれたオペラ『椿姫』の舞台に出合つたことが、オペラ歌手を志すきっかけになりました。それまでも、学校の重唱団でピアノ伴奏をしながら歌っていると、私の声のほつがよく目立つといったこともあったので、歌の道に進むことにあまり迷いはありませんでした。

韓国でも音楽大学に通いましたが、より広い世界に出合つことを夢見た私は、学校を中退し留学をする決心をしました。音楽のなかでもオペラはドイツ、イタリア等ヨーロッパからの芸術物であるため、ヨーロッパで勉強するという選択肢もありましたが、

当時一九歳である私は叔父がいる日本のほうが環境面での不安がないし、日本にはヨーロッパやアメリカからの著名な演奏家と

先生がくるという話を叔父より聞き、ヨーロッパと比べて遜色のない日本での勉強を決意し、一九九一年から東京の武蔵野音楽大学に入学しました。

ここでは高名なエレナ・オブラズツォワ先生をはじめとした方々に歌の基本を習いました。オブラズツォワ先生のお蔭で、在学中の、九四年にはロシアのポリシヨイ歌劇場で『道化師』でデビューを果たすこと

私の芸大での研究分野は「日本における音楽療法の現状分析」です。音楽療法とは、音楽の働きを用いて、心身の障害の回復や機能の改善を図る研究実践です。今年から芸大に留学してきたのですが、ベルギーにいと、アジアの音楽療法の現状が入ってこないということが大きな理由でした。

音楽療法の分野では、国や地域ごとにさまざまな実践や取り組みがなされています。イギリス、アメリカ、フランス、アルゼンチンが先進的な国で、日本の音楽療法もアメリカから輸入されたものが中心です。そこで私は、日本独自の音楽療法がないかを探しているのです。たとえば伝統的な邦楽を用いた音楽療法が存在しないか調査しているのですが、まだ見つかっていません。

留学先に芸大を選んだのは、作曲家の友人が、芸大には邦楽の優れた先生が集まっていると教えてくれたからです。邦楽の基礎を学べる講座を一科目受講していますが、これからはたとえば神楽などを自分で見てまわりたいと思っています。

ベルギーにいたとき日本について知っていたのは、歌舞伎・能・お寿司……といったことくらい。新聞に載っていることも、経済問題やシリアスな話題ばかりで、日本人の日常生活はヨーロッパではほとんど知られていません。でも、日本人もヨーロッパに対して同様だと思います。

日本に来ておもしろいと感じたのは、短

期間に大きな変貌を遂げたためか、世代によって趣味が違い、聴く音楽も全く異なります。だから日本の音楽や日本人についてどう思つかと尋ねられても、一概に答えることはできないでしょう。

また芸大の学生はさまざまな面でハイレルベルなので、そこだけで日本についての判断はできない。だから芸大の外の世界にもしっかりと目を向けて研究活動を続けていこうと思っています。

Mairiaux Isabelle

メリオ・イザベル

[ベルギー]

修士(応用音楽学)1年

日本独自の音楽療法を探るために。



留学生の受け入れ

現在と今後

根木 昭

二〇〇四（平成一六）年五月一日現在、本学の留学生は二〇四名を数えるに至りました。昨年度まで二桁であったのが、今年度にはじめて三桁の舞台に乗ったわけです。男女の内訳は、男四一名、女六三名で、（日本人学生と同じく）数の上では女性上位になっています。また、美術関係の専攻と音楽関係の専攻を比較しますと、前者が七九名、後者が二五名で、美術関係の留学生が音楽関係の留学生の三倍強を占めています。なお、本学の留学生は、その大半が大学院レベル（研究生を含む）に在籍しているのも大きな特色といえます。出身国を多い順にみますと、いちばん多いのが韓国の三八名、次いで中国の二五名、その次が米国の八名となっています。その他の国々は、おおむね一〜四名ですが、図にみるように、アジア、オーストラリア、中近東、ヨーロッパ、南北アメリカと、アフリカを除く世界のほぼ全域にわたっています。

本学は、一八八七（明治二〇）年の東京美術学校、東京音楽

学校の設立以来、今日に至るまで数多の著名な芸術家、研究者を世に送り出して来ました。このような過去二二〇年近くにわたる歴史と伝統、および教官・卒業生の国内外にわたる精力的な活躍とがあいまって、全世界から多くの留学生を本学にひきつけてきたものと思われまふ。一方、本学も、今年の四月から国立大学法人に移行し、新しい出発の時を迎えました。私見ですが、今後本学としては、アジアにおける芸術の拠点大学として、アジア各国の芸術系大学からの求心力をさらに強めつつ、他方で欧米の芸術系大学に対峙していくという姿勢を基本としながら、新たな国際的展開を図っていくことが必要かと思われまふ。今後の留学生対策は、このような長期的戦略と密接に関係しており、国際交流室を中心とするこれからの議論と方向付けに期待しているところです。

差し当たり、留学生の受け入れに限って考えますと、アジアをはじめとする欧米以外の国々からは、わが国の伝統的な芸術



長野への旅行時の集合写真

文化、欧米から受容した芸術文化のいずれの分野を問わず、幅広い受け入れを行っていくことになるでしょう。また、欧米系の諸国からの受け入れは、伝統的な芸術文化の分野が中心になるでしょうが、欧米起源の芸術文化でもわが国が先端を担っている分野に関しては、積極的にその受け入れを図っていくべきものと考えられます。これまでも、すでにそのような受け入れの構図ができておりますが、今後は、先の長期的な戦略とも関連しながら、受け入れの方針がより明確化されていくことと思われまふ。ただ、人的、物理的な制約から、受け入れにもおのずから限界があります。大学全体の発展の方向と歩調を合わせながら、今後適切な受け入れ数を設定していく必要があります。

留学生に対しては、懇親会や日本文化に接する機会を設けることなどを中心に、大学として毎年いくつかの催しを行っています。例えば、二〇〇四（平成一六）年度では、五月の「学長主催外国人留学生懇談会」、「日本文化体験フェスティバルハートイン 安曇野穂高」への参加、「外国人留学生見学旅行」、九月の文化庁舞台芸術国際フェスティバルプレイベント「未来の新星たち」留学生ガラ・コンサートへの参加がすでに実施済みであり、また今後、一〇月には「国際交流会館在館者と地域との懇談会」、一一月には「日本文化体験フェスティバル」音、一二月には「日本文化体験フェスティバル」茶の湯と日本文化」などを予定しています。

七月の穂高町制五〇周年記念事業（一六～一九日）には、美術学部の三田村有純助教授（漆芸）の肝いりにより、留学生一四人が期間中を通じて参加し、美術、音楽活動をはじめ、町民との芸術文化交流を行いました。また、見学旅行（一七～一八

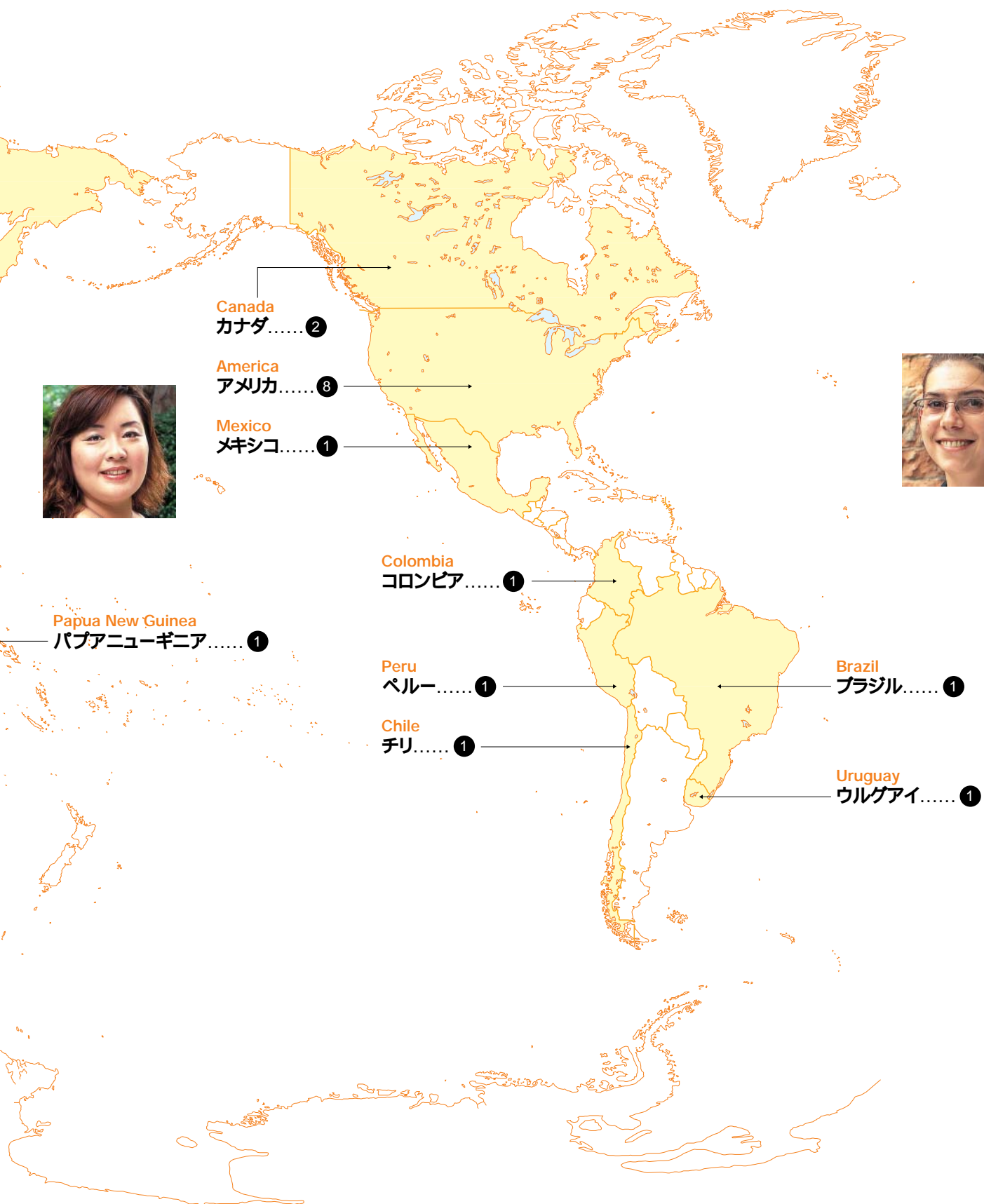
日）もこの事業に合流し、旅行参加留学生三一人が、先の一四人とともに、一夜、現地の人たちと楽しい交歓のひとつを過ごしました。また、九月の文化庁舞台芸術国際フェスティバルへの参加（五日）は、演奏芸術センターの松下功助教授（作曲）のコーディネートにより、現役留学生二五人ほか留学生OBによる演奏及び企画協力によって実施されました。

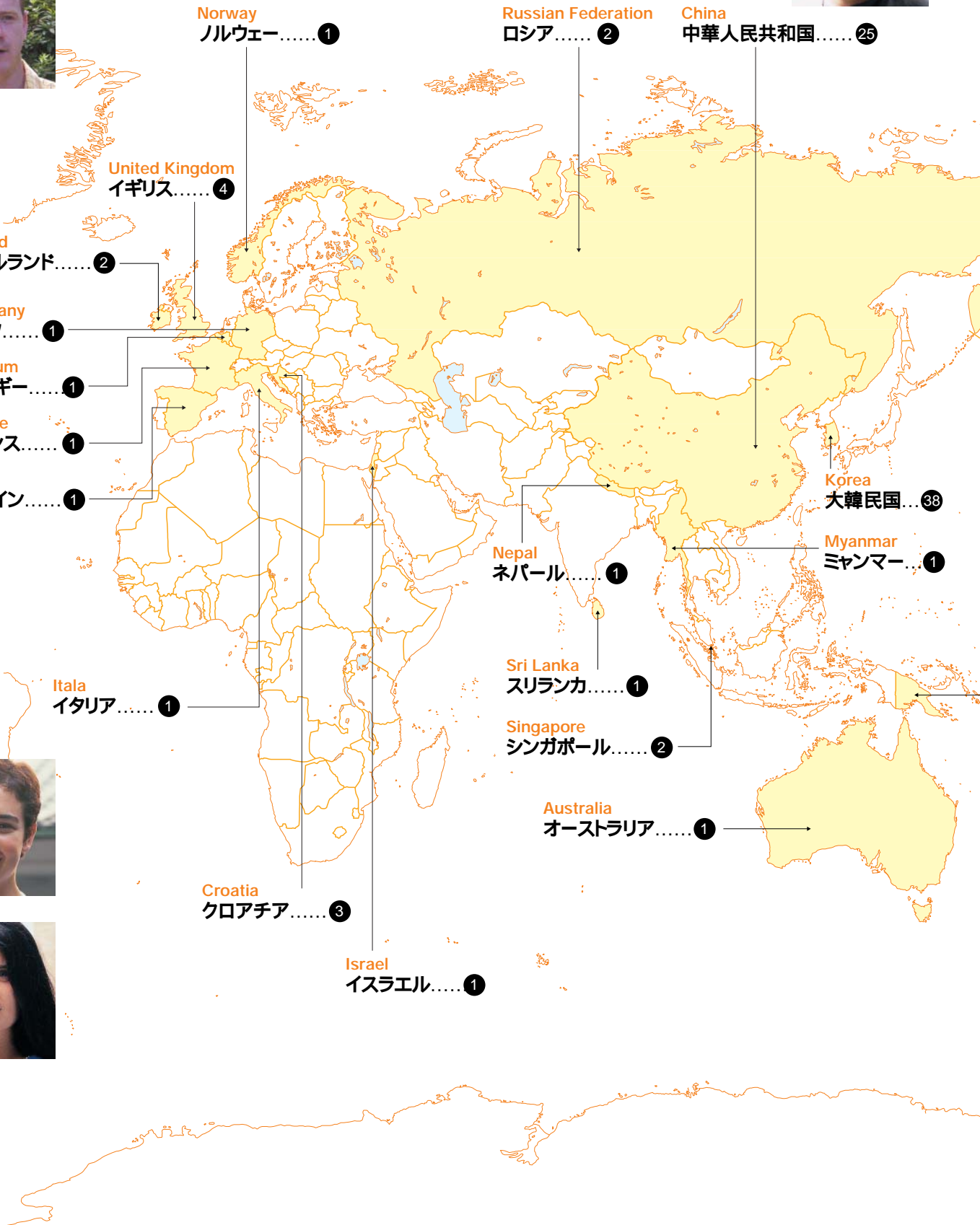
最後に、話を現実に戻しますが、留学生についての大きな課題の一つに宿舎の問題があります。本学には「国際交流会館」がありますが、単身部屋、夫婦部屋、家族部屋を合わせて三四室であり、入居期限も、ほかの留学生への均霑を考慮し一年としております。また、大学村「東京国際交流館」では、単身部屋九室、夫婦部屋一室が割り当てられているに過ぎません。そのほか、石神井の寮にも一部の留学生が入っておりますが、大学として用意できる宿舎の数は圧倒的に少ない状況です。民間アパートに入る場合は、礼金や敷金をめぐってしばしばトラブルが生じているほか、保証人があります。保証人については、大学としても考えなければなりません。保証人については、何らかの措置を講ずる必要があるのではないかと考えられます。なお、特に途上国からの留学生は裕福とはいえず、宿舎もさることながら、奨学金や授業料の減免など、ある程度の配慮を行うこともこれからの課題といえまふ。

以上、本学の留学生の受け入れの状況等について紹介しましたが、先にも述べましたように、本学の留学生対策は、今後ますます重要になっていくものと思われまふ。大学全体の国際交流の在り方の中で留学生の受け入れが明確に位置付けられ、その一環としての機能を十分に発揮できるよう、留学生センターとして努力していきたいと考えております。

（ねき・あきら／音楽学部教授・留学生センター長）

東京芸大外国人留学生 出身国別MAP





0 2000km

(単位は人。平成16年5月1日現在)